

石狩浜漂着物考古学ノート 3  
2018年石狩浜・石狩川河口左岸採取の漂着物  
擦文文化の遺物・白い徳利・竹舟？・赤煉瓦と丸瓦

Ishikari Beach driftage archeology note 3:  
Driftage on Ishikari Beach and left bank of Ishikari estuary  
—*Satsumon* cultural artifacts, a white *sake* bottle, a bamboo boat—

石橋 孝夫\*  
Takao ISHIBASHI\*

キーワード：漂着物，石狩浜，石狩川河口

はじめに

筆者は冬期間を別として，毎日のように北海道日本海側の石狩浜海水浴場から石狩川河口左岸までの海岸を歩き漂着物の観察と採取を行っている。この海岸の漂着物は海流に乗り漂着する「海由来の漂着物」と石狩川を經由して漂着する「川由来の漂着物」の2種類がある。

筆者はこのうち「川由来の漂着物」を主に調査している。そのなかでも中心は考古学や歴史に関連する土器片，陶磁器片，木製品などである。漂着物の内容の一部は，いしかり砂丘の風資料館の連続講座「石狩大学博物館」や石狩市広報誌「広報いしかり」，本紀要などで公表している（石橋，2018a；2018bなど）。

2018年も石狩浜や石狩川河口で多数の「川由来」の漂着物があり調査した。本稿では4件について取り上げ記載する。このうち「竹舟？」とした漂着物は「海由来」である。

また図1に石狩市平野部の地形形成概念図と関係する遺跡や漂着地点について示しているので参照されたい。

1. 擦文文化の遺物

石狩浜では石狩川河口付近を中心に縄文時代をはじめとする土器片や石器片が漂着する。多くは単なる石のように見え，気づく人はそう多くない。

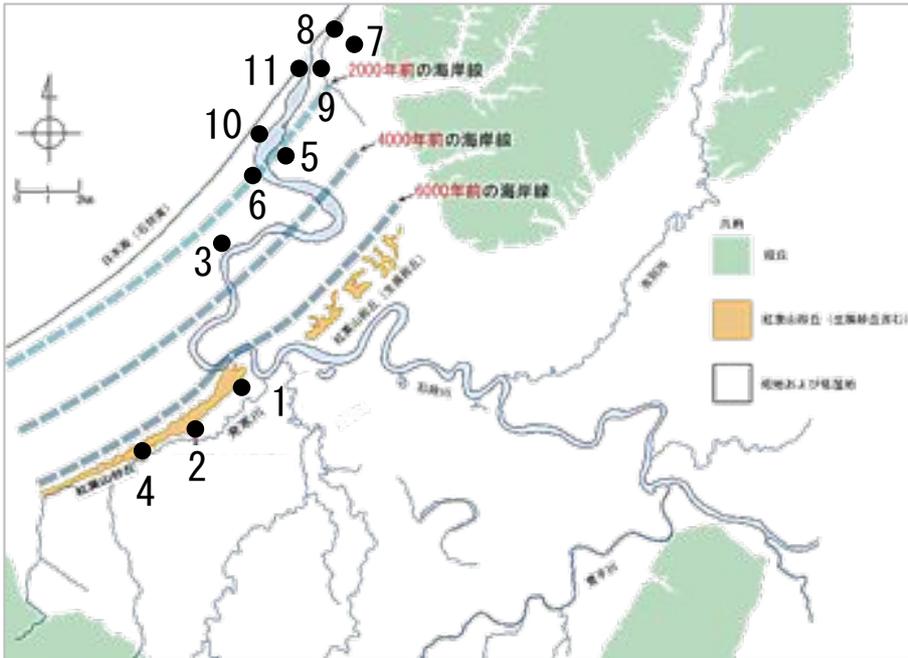
石狩市の平野部の地形は縄文時代前期（約6000年前）以降に形成され，遺跡の分布は陸化順に内陸から海に向かい年代が新しくなる（図1）。地形のうち最も新しいのは石狩砂丘や本町地区である。これまで石狩浜などに漂着した遺物で最も古いもので縄文時代後半初め（約3000年前）の土器片，最も新しいものが擦文時代（AD 7世紀～12世紀）の土器片である。2018年では続縄文時代（BC 2世紀～AD 6世紀）の最終末の後北式の土器片（5世紀ごろ）が多く採取された。

今回報告するのは擦文時代の土器片（図2）と土製支脚（図3）である。

①土器片

2018年12月，石狩川右岸河口で写真のような甕形土器の口縁部を採取した。文様から西暦8世紀

\*いしかり砂丘の風資料館（学芸協力員） 〒061-3372 北海道石狩市弁天町30-4



- 1 上花畔1 遺跡
  - 2 石狩紅葉山49号遺跡
  - 3 志美4 遺跡
  - 4 紅葉山33号遺跡
  - 5 若生C 遺跡
  - 6 船場町遺跡
  - 7 聚富土上遺跡
  - 8 聚富漁場跡
  - 9 越後焼酎德利一括出土地点
  - 10 石狩市本町市街地
  - 11 完形徳利漂着地点
- (いしかり砂丘の風資料館  
常設展示図をもとに位置を加筆)

図1. 位置図.

ごろと推定され、擦文文化のなかでは比較的古い時期に属する。河口付近ではこの時期の遺跡は石狩川右岸にあるが、左岸では河口から上流4 kmほどまで遺跡は確認されていない。

筆者はこの時期の土器片を河口で初めて採取した。破片は黒色で高さ7 cm×幅10 cm、厚さ5 mm、甕の口から頸部にかけての破片で横走沈線と矢羽状の文様が組み合わされている。この組み合わせはかなり珍しい。矢羽状の模様は先端をV字状に加工したへら状の工具を連続して押し付けたものである。また胎土は多量の石英粒含んでおり、これまで石狩市内で知られている同時期の土器とは異なる特徴をもっており、他地域から持ち込まれた可能性がある。



図2. 甕口縁部破片 (2018.12.03) .



図3. 土製支脚上面と断面 (2018.10.8) .

## ②土製支脚

写真2に示した赤色の塊は土器片ではなく「土製支脚」である。この道具はカマドで使う台の一部で擦文文化に特徴的な遺物である。大きさは幅6 cm、高さ5 cmある。上部に土器をのせるための平らな面がわずかに残っている。また土器のように丁寧な成形はしないので紐状の粘土を重ねた

跡が観察される。分厚いのが特徴の一つで、擦文土器の厚みが5mm前後であるのに対しこれは30mmと6倍ある。

使用法は、図4に示したように平らな面を上にしてカマド燃焼部に置き、上に甕を置く。また空気の流れを良くするため2か所をコの字状（写真3の中央部）にくり抜くのが普通であるが、採取された破片には残っていない。住居が使用されなくなっても、そのままカマド内に残されることが多く、この道具が漂着したということは竪穴住居が流された可能性がある。

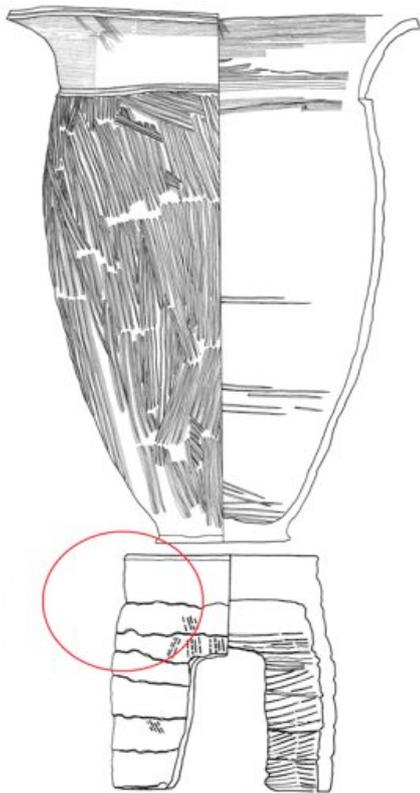


図4. 甕（吉崎ほか編、1975）と土製支脚（北海道大学埋蔵文化財調査室編、1986）。赤丸が漂着部分。

## 2. 白い徳利

2018年3月25日、石狩川左岸河口に行くと、灰色がかった徳利が横倒して転がっていた（図5）。発見場所は水際でなく十数m内陸側で、荒天時に打ち上がったものとみられる。これまでの筆者の経験では漂着した陶磁器は必ず壊れており完品は皆無であった。

ところがこの徳利は胴部に若干ヒビが入っているだけでほぼ完形品だった。

器形は首が細長く鶴首で、胴部がかなり球状に膨らむ。底部は上げ底でわずかに高台がつく。器高22cm、胴回り38cm、底径6.5cm、容量は約500ccで約3合に近い。色は灰色にみえるが、釉



図5. 発見直後の徳利。背後は石狩川（2018.03.25）。

葉は透明で地の色を反映している。胴部はかなり顕著な轆轤目がある。また胴部に白い陶片が貼りついている。これは焼成過程で別の徳利が破裂して付着した破片であるが、周囲を打ち欠いて平らにしてある。

石狩浜あるいは石狩川河口に漂着し採取される陶磁器類は、幕末から昭和と幅広い時代にわたる。このうち、最も量が多いのは幕末から明治期の陶磁器である（木戸・石橋, 2014）。

種類は徳利、膾皿、皿、碗、甕（図6, 7, 8）などで、時には木製椀（図9）もみられる。生活雑器が主体で、関根達人らがいう「幕末蝦夷地3点セット」＝「肥前産の笹絵徳利・コンプラ瓶・越後産焼酎徳利」といった徳利類、肥前系の磁器の膾皿（三平皿）、北部九州の上野・高取系の中甕」（関根・木戸, 2018）が含まれている。筆者はこうした知見に基づき、漂着した完形の白い徳利は、小型であるが「越後産焼酎徳利」（図



図6. 過去に採集された越後産焼酎徳利（完形品は聚富漁場跡出土品）。



図7. 碗（2011.06.26）。



図8. 膾皿（三平皿）（2018.12.06）。



図9. 椀。輪島塗か？（2015.11.11）

10, 11) の1種ではないかと考え、類例を調査し始めた。

この徳利の大きさは概ね器高24~26cm前後、容量1440ccで8合前後が多い。初期のものには鶴首を持つものが多く、漂着した徳利も古い時期のものではないと考えた。この徳利の機能は焼酎を詰め北海道に輸出するための瓶である。焼かれたのは新潟市や阿賀野市付近で、幕末から明治半ばまで数百万本が生産されたという。新潟では「松前徳利」の名前があり、北海道では「貧乏とっくり」「8合とっくり」「がべとっくり」などと呼ばれていた(松下ほか, 1978)。

北海道博物館はじめ小樽市以南の博物館等合計12施設で収蔵資料の調査を行い、これまでに54点の越後産焼酎徳利を確認した。現在も調査は継続中であるが、今回漂着したような小型の徳利は見

当たらなかった。さらに11月に入り原産地である新潟市まで足をのばし、新潟市西蒲区巻郷土資料館、財団法人鶴友会博物館で徳利を観察したが、焼酎徳利に限らず5合入り(図12)が最低で、3合という小さなものや同じような質感の徳利は見当たらなかった。

実は博物館等の越後産徳利を調査中、数人の専門家からは漂着した徳利はそもそも越後産ではないのではという意見があった。理由は色調や胎土の感じから陶器でなく「磁器」で「白磁」ではないかというものであった。そう指摘されて改めて高台部などを観察すると白くガラス質で陶器とは異なる質感であることが理解できた。

さらに、白磁の本場である佐賀県にある県立九州陶磁文化館に画像を送り問い合わせると次のような回答があった。「画像を見る限りでは白磁の



図10. 越後産焼酎徳利.  
(石狩尚古社蔵)



図11. 越後産焼酎徳利.  
(神恵内村蔵)



図12. 5合徳利.  
(新潟市巻郷土資料館蔵)

ように見え、肥前または肥前系の白磁瓶（徳利）である可能性が高い。年代は大まかに18世紀後半から19世紀前半と思われる。」また産地については「研究が深まっておらず特定は難しい」（私信）という。

このような指摘と越後産焼酎徳利の調査からみて、石狩川河口左岸で採取の徳利は越後産焼酎徳利ではなく、産地は不明だが白磁徳利であると判断される。

### 3. 竹舟？

この漂着物は製作意図が不明であるが、形状が舟のような形をしているので「竹舟？」と仮称した。全長10m近く、石狩浜の漂着物としては大型の部類に入る（図13）。

2018年9月6日、石狩市いしかり砂丘の風資料館学芸員から石狩浜海水浴場に竹を組み合わせた船のような形をした漂着物があるとの情報をいただいた。早速、見に行くくと石狩浜海水浴場の西端近くにその漂着物があった。細長いボートのような形で舳先を東側にむけて漂着していた。竹には多数の生きたエボシガイが付着しており長期間の漂流を物語っている。竹は青みを残しているものもあり、今年伐採した竹を使用したとみられる。

漂着物の大きさと構造は次のとおりである。長さ9.6mの5本（両側に2本、中央に1本、最大径5cm）と長さ1.9m（中央に1本）の真竹？を揃えて並べてある。船尾側から190cmの部分に角材1本（長さ74cm）横にわたしてある。その中央に先端を杭状にした棒1本（長さ80cm）を立ててある。この棒には針葉樹（杉？）の枝先を上にして縛り付けてある（図14）。またこの部分から四方（舳先一船尾、両側）に紐が張ってある。船尾側の紐に水色の板が付けてあり、「43」という数字が書かれている。竹や横木などの結束には漁網と紐が使用されており、漁業者が製作した可能性がある。

次にこの漂着物がどのようなものであるか若干の検討を加える。漂着物を構成している竹とマス

ト状の部分に縛り付けられた針葉樹は杉とみられる。これらの材料のうち杉は北海道南部にみられるが、竹は北海道には自生しない。これらの点からこの舟形の漂着物は北海道以南で製作され、流れてきたと考えてよいだろう。

長崎県などでは、お盆に船をかたどった精霊船（西方丸）を製作し、海に流して先祖の霊を慰める風習があるといい、形状などから、この漂着物はそうした精霊船に類するようなものではないかと考えられる。



図13. 竹船。漂着直後（2018.09.13）。



図14. 縛り付けられていた針葉樹（杉か？）。

#### 4. 赤煉瓦と丸瓦

2018年12月石狩川右岸河口で煉瓦と丸瓦を採取した。この2種はこれまでも何回か見ているが採取したのは初めてである。採取した理由は煉瓦に生産工場あるいは発注者を示す刻印<sup>㊦</sup>があったからだ(図15, 16)。

煉瓦は小口部分の破片。赤褐色でいわゆる赤煉瓦である。計測値は縦5.5cm, 横10.5cm, 長さは破損により不明である。北海道の煉瓦の歴史は明治5(1872)年, 現北斗市茂辺地で開拓使により始まり, 明治17(1884)年には現札幌市白石区, 明治24(1891)年には現江別市江別太で, 明治31(1898)年には現江別市野幌と変遷し, 現在も江別市で製造が行われている(水野, 2010)。現在の「普通煉瓦(JIS1250)」(1987年制定)の規格は長さ21cm幅10cm厚さ6cmで許容誤差は±5mmである。今回採取した煉瓦は長さが不明だが幅と厚さがこの規格に近い。このことから比較的最近の煉瓦の可能性もあるが, この煉瓦の特徴は小口に「ヤマヨ」という刻印がみられることである。これは生産者や発注者の屋号とみられる。さらに調査が必要であるが, 現在の煉瓦には該当する刻印は無いようである。

いしかり砂丘の風資料館には4点の「明治七年函館製造」という刻印の入った煉瓦が収蔵されている(図17)。開拓使が茂辺地で作った煉瓦で「開拓使石狩罐詰所」跡(明治10年開業)から出土したものだという(出土場所年次とも不詳・現石狩市観光センター付近と言われている)。大きさは21.0×10.7×5.6cm前後で, 小口の比較では, 漂着した煉瓦とほぼ近い値を示している(図17)。色はくすんだ赤で表面に自然釉のような層を持つもの3点, その層が無く黄褐色のもの1点である。漂着した煉瓦は赤色で表面がザラザラしている。

石狩市郷土研究会の調査では, 明治31年, 石狩町八幡町若生町に<sup>㊦</sup>(ヤマヨ)という屋号の店があったことがわかっている(高瀬・吉岡, 2008)。煉瓦の漂着場所が河口で, 若生町とは距



図15. 赤煉瓦(2018.12.02)。



図16. 屋号(ヤマヨ)の拡大。



図17. 漂着煉瓦と「明治七年函館製造」の刻印のある開拓使製造煉瓦(いしかり砂丘の風資料館蔵)。

離的にも近いのでこの店が発注した煉瓦の可能性がある。この商店は「吉川」といい太物小間物米曾荒物雑貨商をしていたようである。現在この店は石狩市内には無いようであるが、今後関連を調べる必要がある。

また上記の煉瓦と同じ場所に、表面が黒色で内側が灰色の丸瓦が漂着していたので採取した（図18）。大きき縦6cm、横5cmの破片で、厚さは8mmある。外面が黒色、内面が灰色で素焼き。表面に青海波が施文されている。生産地、年代ともに不明だが、素焼きで表面だけが黒いので「いぶし瓦」とか「黒瓦」と呼ばれる瓦と思われる。石狩市内では明治後半から、石造で和洋折衷の建物が建てられるようになるが、使用された瓦産地については良く分かっていない。



図18. 丸瓦（黒瓦）（2018.12.03）。

**謝辞**：北海道博物館，新潟市巻郷土資料館，財団法人鶴友会鶴友会博物館，佐賀県立九州陶磁文化会館，小樽市総合博物館，よいち水産博物館，共和町かかし古里館，神恵内村教育員会，岩内町郷土館，八雲町郷土資料館，せたな町瀬棚生涯学習センター郷土館，石狩尚古社には所蔵資料の閲覧，撮影についてご協力いただいた。記して感謝申しあげる。

## 引用文献

- 北海道大学埋蔵文化財調査室 編，1986. サクシュコトニ川遺跡：北海道大学構内で発掘された西暦9世紀代の原初的農耕集落 2 図版編，北海道大学埋蔵文化財調査室。
- 石橋孝夫，2018a. 石狩川河口に漂着したアイヌ文化の木製品. いしかり砂丘の風資料館紀要，8：v-vi.
- 石橋孝夫，2018b. 石狩浜漂着の魚叩き棒は誰のものか？—北海道魚叩き棒の系譜を考える—. いしかり砂丘の風資料館紀要，8：1-22.
- 木戸奈央子・石橋孝夫，2014. 石狩浜漂着物考古学ノート2 石狩浜・石狩川河口に漂着した陶磁器. いしかり砂丘の風資料館紀要，4：55-59.
- 松下亘・氏家等・笹木義友，1978. 焼酎徳利について—明治期における新潟と北海道との関連資料—. 北海道開拓記念館研究年報，6：47-63.
- 水野信太郎，2010. 江別市内における煉瓦産業120年間の変遷. 人間福祉研究（北翔大学），13：165-180.
- 関根達人・木戸奈央子，2018. 越後産焼酎徳利（「松前徳利」）の生産と流通. 中近世陶磁器の考古学第8巻（佐々木達夫 編），雄山閣，246-267.
- 高瀬たみ・吉岡玉吉 編，2008. 石狩市内の屋号. いしかり暦，21：20-44.
- 吉崎昌一・横山英介・直井孝一・伊藤千尋・鮑津博史・岡安武・中岡宇田子 編，1975. 紅葉山砂丘における考古学的調査報告1975，北海道石狩郡石狩町教育員会紅葉山遺跡調査団。